**降誕節第６主日　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　2025年2月2日**

**「この道」**

**詩編145編17～21節**

**145:17 主の道はことごとく正しく／御業は慈しみを示しています。**

 **145:18 主を呼ぶ人すべてに近くいまし／まことをもって呼ぶ人すべてに近くいまし**

 **145:19 主を畏れる人々の望みをかなえ／叫びを聞いて救ってくださいます。**

 **145:20 主を愛する人は主に守られ／主に逆らう者はことごとく滅ぼされます。**

 **145:21 わたしの口は主を賛美します。すべて肉なるものは／世々限りなく聖なる御名をたたえます。**

**使徒言行録24章1～23節**

**24:1 五日の後、大祭司アナニアは、長老数名と弁護士テルティロという者を連れて下って来て、総督にパウロを訴え出た。**

 **24:2 -3パウロが呼び出されると、テルティロは告発を始めた。「フェリクス閣下、閣下のお陰で、私どもは十分に平和を享受しております。また、閣下の御配慮によって、いろいろな改革がこの国で進められています。私どもは、あらゆる面で、至るところで、このことを認めて称賛申し上げ、また心から感謝しているしだいです。**

 **24:4 さて、これ以上御迷惑にならないよう手短に申し上げます。御寛容をもってお聞きください。**

 **24:5 実は、この男は疫病のような人間で、世界中のユダヤ人の間に騒動を引き起こしている者、『ナザレ人の分派』の主謀者であります。**

 **24:6 この男は神殿さえも汚そうとしましたので逮捕いたしました。**

**24:8 閣下御自身でこの者をお調べくだされば、私どもの告発したことがすべてお分かりになるかと存じます。」**

 **24:9 他のユダヤ人たちもこの告発を支持し、そのとおりであると申し立てた。**

 **24:10 総督が、発言するように合図したので、パウロは答弁した。「私は、閣下が多年この国民の裁判をつかさどる方であることを、存じ上げておりますので、私自身のことを喜んで弁明いたします。**

 **24:11 確かめていただけば分かることですが、私が礼拝のためエルサレムに上ってから、まだ十二日しかたっていません。**

 **24:12 神殿でも会堂でも町の中でも、この私がだれかと論争したり、群衆を扇動したりするのを、だれも見た者はおりません。**

 **24:13 そして彼らは、私を告発している件に関し、閣下に対して何の証拠も挙げることができません。**

 **24:14 しかしここで、はっきり申し上げます。私は、彼らが『分派』と呼んでいるこの道に従って、先祖の神を礼拝し、また、律法に則したことと預言者の書に書いてあることを、ことごとく信じています。**

 **24:15 更に、正しい者も正しくない者もやがて復活するという希望を、神に対して抱いています。この希望は、この人たち自身も同じように抱いております。**

 **24:16 こういうわけで私は、神に対しても人に対しても、責められることのない良心を絶えず保つように努めています。**

 **24:17 さて、私は、同胞に救援金を渡すため、また、供え物を献げるために、何年ぶりかで戻って来ました。**

 **24:18 私が清めの式にあずかってから、神殿で供え物を献げているところを、人に見られたのですが、別に群衆もいませんし、騒動もありませんでした。**

 **24:19 ただ、アジア州から来た数人のユダヤ人はいました。もし、私を訴えるべき理由があるというのであれば、この人たちこそ閣下のところに出頭して告発すべきだったのです。**

 **24:20 さもなければ、ここにいる人たち自身が、最高法院に出頭していた私にどんな不正を見つけたか、今言うべきです。**

 **24:21 彼らの中に立って、『死者の復活のことで、私は今日あなたがたの前で裁判にかけられているのだ』と叫んだだけなのです。」**

 **24:22 フェリクスは、この道についてかなり詳しく知っていたので、「千人隊長リシアが下って来るのを待って、あなたたちの申し立てに対して判決を下すことにする」と言って裁判を延期した。**

 **24:23 そして、パウロを監禁するように、百人隊長に命じた。ただし、自由をある程度与え、友人たちが彼の世話をするのを妨げないようにさせた。**

1.

**真夜中にパウロは護送されました。エルサレムからアンティパトリスへさらにカイサリアへとその道を進みました。多くのローマ兵と共に、何よりもイエス様がパウロと共に歩んで下さり、パウロの道のりを守り導いて下さり、いよいよローマへの道が開かれていったのです。**

**5日してエルサレムから大祭司アナニアと長老数名と弁護士テルティロがカイサリアにやって来ました。彼らの目的は総督フェリクスが開く裁判でパウロを有罪に、もっとはっきり言えばパウロを死刑にすることです。初めから結論ありきでユダヤ人たちはこの裁判に臨んだのです。**

**テルティロはパウロを告発します。まずフェリクスにおべっかを使います。いかにも汚いやり方です。そして、パウロが疫病のような人間であると言うのです。ある聖書は「疫病」を「ペスト」と訳しています。ペストのような人を死に至らしめる恐ろしいウイルスでありこのままほおって置けばそのウイルスが世界中に広まってしまう。だからすぐに取り除かなければいけない、そんな危険な人物であると主張するのです。その理由が次の3つのことです。世界中のユダヤ人に騒動を起こしていること、「ナザレの分派」つまりキリスト教の首謀者であること、神殿を汚そうとしたこと、そういった理由からパウロを逮捕して今私たちは告発している、それは調べていただければ簡単にわかるはずだと主張をしました。ユダヤ人たちはテルティロの告発を支持します。今度こそパウロを死刑に出来る。フェリクス閣下は正しい裁きをして下さるに違いない。おそらくユダヤ人の誰もがそう思っていたでしょう。私たちはここを読んでわかりますが、ユダヤ人たちの主張は今までの主張を繰り返しているだけです。根拠も証拠もなくただ単にパウロを死刑に持ち込みたい、そのような憎しみだけで彼らが動いているのは見え見えなのです。**

**総督フェリクスはパウロに発言の機会を与えます。パウロは理路整然とユダヤ人たちの主張に反論するのです。11～13節で「世界中のユダヤ人に騒動を起こしていること」に対して反論します。そもそも私がエルサレムに来て12日しかたっていないし、私が群衆を扇動するのを見た者は誰もいないと言います。さらに14～16節で「ナザレの分派」つまりキリスト教の首謀者であることに対して反論するのです。ただここは反論というよりもパウロが信じている「この道」すなわちキリスト教がどういう宗教であるのかを語ります。ユダヤ人たちが主張するような何か危険な思想ではなく、ユダヤ人たちが信じている同じ神様を信じて礼拝して、律法と預言者の書つまり旧約聖書に書かれていることを信じているし、ユダヤ人と同じように復活を信じて復活の希望を抱いているのですと語ります。さらに17～21節で「神殿を汚そうとしたこと」について反論するのです。私は神殿で清めの式にあずかり供え物をささげていたにすぎないのです。もしそれでアジア州から来たユダヤ人たちが訴えるならそのユダヤ人たちがここに出頭すべきです。そうでなければ私が最高法院で不正をしているのを見たのであれば今言うべきです。私は「死者の復活のことで裁判にかけられている」と叫んだだけですとことごとく反論をしたのです。**

**このパウロの弁明を告発したユダヤ人たちはどんな思いでまたどんな表情で聞いていたでしょうか。今まではパウロの弁明に怒り狂って殺そうとしました。しかし、今日のところではユダヤ人たちの反応は記されていません。恐らく自分たちの告発がことごとく反論されてしまって、はらわたが煮えくり返るような思いだったでしょう。しかし、ここはエルサレムではありません。カイサリアの総督フェリクスの前です。もしここでユダヤ人たちが怒りに我を忘れてしまったら、自分たちの立場が危うくなってしまうので、ぐっと怒りをこらえていたと思います。**

**ユダヤ人たちの反応は記されていませんが、総督フェリクスがどんな反応をしたかは記されています。彼は「この道」についてかなり詳しく知っていたと記されているのです。「この道」パウロが信じて歩む「この道」、そして私たちが信じて歩む「この道」です。イエス・キリストです。イエス・キリストを信じる信仰の道です。フェリクスは異邦人ですがキリスト教のことをかなり詳しく知っていました。ですので、パウロがユダヤ人たちから訴えられるようなことは何もしていない、ましてや死罪に当たることなど何もないとわかったのです。ただ、ここでパウロを無罪とする判決を下してしまうと、ユダヤ人たちから自分が憎まれてしまうのです。そしてパウロを無罪放免として自由にすると、怒りに燃えたユダヤ人たちがどんな手を使ってでもパウロを殺すでしょう。ローマの市民権を持っているパウロが殺されてしまうと、それはフェリクスの責任になってしまうのです。そうかといって、有罪にする理由は何もないのに有罪にはできません。結局フェリクスが取った判断は「先送り」です。裁判の延期です。といってもフェリクスが在任中に裁判が開かれた形跡がありませんので、ただ単に結論を先送りにしてパウロにはある程度自由を与えて監禁しておいたのです。「先送り」とはどこかの国の政治家や官僚のようですが、彼も千人隊長と同じで面倒なことには関わりたくないのです。ただ結果的にフェリクスが問題を先送りしてパウロを監禁したことが、パウロをユダヤ人から守ることになったのです。やはりここでも神様の導きがあるのです。**

**ある説教者が今日の聖書箇所の説教で「ここには裁判闘争が描かれています。しかし、ここで問題なのは、イエス・キリストのよみがえりのことです」と語っています。パウロがこの弁明で語っているのはイエス様の復活の事なのです。15節でパウロは「更に、正しい者も正しくない者もやがて復活するという希望を、神に対して抱いています。この希望は、この人たち自身も同じように抱いております。」と語っています。このパウロの言葉は文脈から考えるとなくても通じる言葉です。復活の事を語らなくてもこの道を信じて従って歩み、神を礼拝し、聖書に書かれていることを信じていると語ることで、この道、つまりイエス・キリストを信じる信仰は決して危険なものではないことが伝わります。けれどもパウロは復活の事を語らずにはいられなかったのです。「正しい者も正しくない者もやがて復活するという希望を、神に対して抱いています。」パウロを告発するユダヤ人のファリサイ派の人々は神様の律法をきちんと守る正しい者だけが復活すると信じていました。しかし、ここでパウロは「正しいものだけでなく正しくない者もやがて復活する希望を抱いている」というのです。「正しくない者も復活する」この正しくない者というのがパウロ自身の事ではないかと考えられているのです。かつてパウロはイエス様を救い主と信じる人々、イエスをキリストと信じる人々を迫害し教会を迫害していました。そんなパウロは自分こそが罪人の頭だと言っています。こんな罪深い私がイエス様の十字架と復活の恵みに預かることで復活するのだから、正しい者も正しくない者も復活する希望を抱くことができるのです。イエス様の十字架と復活を信じることで正しくない者が正しい者とされて復活をするのです。**

**パウロが記したローマの信徒への手紙3：22～24にこのように記されています。**

 **「3:22 すなわち、イエス・キリストを信じることにより、信じる者すべてに与えられる神の義です。そこには何の差別もありません。**

 **3:23 人は皆、罪を犯して神の栄光を受けられなくなっていますが、**

 **3:24 ただキリスト・イエスによる贖いの業を通して、神の恵みにより無償で義とされるのです。」**

**イエス・キリストを信じる者はただ神の恵みによって義とされるのです。義とは難しい言葉ですがわかりやすく言うと「正しい」ということです。私たちは皆罪人であり正しい者ではない死の滅びに至る者なのですが、イエス様の十字架と復活を信じることで神様は恵みによって正しい者としてくださるのです。そして復活の希望を与えてくださり永遠の命の希望を与えてくださるのです。罪深い者である私たちが復活の希望に生きることができるのです。**

**それがパウロが語る「この道」なのです。パウロは今日の箇所である10節で弁明する時このように言いました。「わたし自身の事を喜んで弁明いたします」これはパウロを告発した弁護士テルティロのようにフェリクスへのおべっかでしょうか。決してそうではありません。パウロは心の底から喜んで自分自身の事を弁明したのです。「この道」のことを喜びを持って語ったのです。「この道」に従って歩むことがどんなに大きな喜びであるのかを、正しくない者である自分自身がイエス様の十字架と復活の恵みで正しい者とされて復活の希望を抱いて生きることができるその大きな喜びをパウロは天使のような笑顔で語ったのではないかと思います。**

**私たちも今パウロと同じ「この道」を歩んでいます。「この道」は総督フェリクスのように詳しくは知っているけど歩まないのでは意味がありません。それは知識として知っていることが大事なことではなく、「この道」を歩むということが大事なのです。国道20号線があるということは知っていても、やはりその道を歩まないと、結構細いとかよく渋滞するとか最近舗装が新しくなって道がキレイになったとかは実際に歩かないとわかりません。それと同じで一歩を踏み出して「この道」を歩むのです。そうすると「この道」が十字架と復活のイエス様が私たちを復活の希望へと導いて下さっている「復活の希望」の道であり、「永遠の命に至る希望の道」であることが大きな喜びの中でわかるようになるのです。そして、その大きな喜びを私たちの周りの人たちに伝えずにはいられなくなるのです。パウロが喜びを持って自分自身の事を語ったように。イエス様はこんな私を愛して下さっている。こんな罪深い私のために十字架にかかって死んでくださり復活された。こんな私が正しい者とされて復活の希望を抱いて生かされている。死の先になお希望がある。**

**私たちはこれからもイエス様と共に教会の信仰の兄弟姉妹と共に「この道」を希望を持って歩んでいきましょう。**